

中国洛陽新出景教経幢の紹介と史料的価値

森 部 豊

An Introduction to the Luoyang Nestorian Stone Pillar and Their Value as Historical Resources

MORIBE Yutaka

This paper introduces the Nestorian Stone Pillar “discovered” in Luoyang, Henan Province, China in 2006, and also introduces the present state of research on this object. Also included is a discussion of the pillar and its value in the history of cultural negotiation. Nestorianism entered China during the Tang Dynasty, which can be interpreted as a concrete example of cultural negotiation in East Asia. Information concerning the recent discovery of this new historical source needs to be made available to the world of Cultural Negotiation Studies and incorporated as shared knowledge.

This pillar has two inscriptions – *Daqin jingjiao xuanyuan zhiben jing* 大秦景教宣元至本経 and *Jingchuangji* 経幢記 – the second inscription being of great value in the field of cultural negotiation. It attests to the presence of a Nestorian Temple, Nestorianism being a branch of Christianity, at the beginning of the ninth century in Luoyang: the name of the temple was Daqinsi 大秦寺. It also attests to the presence of Sogdian who served as the priests at the Luoyang Daqinsi. It also suggests that there was group of Nestorian Sogdian living in Luoyang. It finally attests to the presence of a settlement of Sogdian outside of Luoyang during the Tang Dynasty.

キーワード：景教（Nestorianism）、景教経幢（Nestorian stone pillar）、洛陽（Luoyang）、大秦景教宣元至本経（Daqin Nestorian Sutra on the Origin: Xuanyuan Zhiben Jing）

一 はじめに

本稿は、2006年に中国河南省洛陽で「発見」された景教に関する新出の石刻史料とその研究状況を紹介し、あわせて文化交渉史上におけるその史料的価値を述べんとするものである。唐代の中国に伝来した景教は、東アジアにおける文化交渉の具体的事例の一つということができ、またこの新出史料の情報

は、中央ユーラシア史および中国史研究者をはじめとする一部の研究者には知られているものの、広く文化交渉学全体の共有知識にはなっていないと思われる、ここに一文を草する次第である。

中国における景教の史料として有名なものは、1623（明・天啓3）年から1625（天啓5）年の間に西安で偶然に発見された「大秦景教流行中国碑」がある¹⁾。この碑文は、現在、中国・西安市の碑林博物館が所蔵し、同館で陳列されている。同碑文には、ネストリウス派の教義や中国伝来の経緯が記されている。また、20世紀初頭に敦煌から発見された文書の中にも、景教の経典とされるものがある²⁾。今回、洛陽で「発見」された経幢は、それらに次ぐ、唐代景教史の研究にとって重要な史料である³⁾。

ところで、この経幢の「発見」の経緯は、いささか興味深いので、以下に紹介しておきたい。話は1976年にさかのぼる。当時、中国河南一帯は干ばつであったため、洛陽市斉村の農民たちも井戸を掘ることとした。そこで村の東南の地点に目を付け、いくつか試しに掘削した。その際、偶然に八角形の石柱を発見したという。この石柱は村の北にある露天の脱穀場に置かれ、後に脱穀場には小屋が建てられたので、その中に保存されていた。ところが、この脱穀場的小屋が火災にあい、石柱もその被害に遭う。その後、2000年ころに脱穀場から幹線道路脇に移動させられたが、盗難に遭うのを恐れた人が、斉村の小学校の校庭に移した。しかし、いつの間にかそこから盗まれ、所在不明になっていたらしい。

その石柱が突如、世間に姿を現したのが、2006年の夏であった。この年8月、洛陽へ仏教石窟の調査に赴いていた中国社会科学院宗教研究所の羅焯氏が、彼の友人から「ある盗掘者が唐朝元和年間の不完全な経幢を掘り出し、経幢の上には「大秦景教宣元至本經」と長編の「経幢記」が刻されている」という情報を聞き、また実際にその友人が所持する拓本を見た。この情報を得た羅焯氏は、9月1日に北京へ戻って、考古学界の重鎮である宿白氏に相談のうえ、国家文物局に報告した。国家文物局と公安局と連携して経幢の所在を探し求め、9月14日に江蘇省無錫に隠されていた景教経幢を見つけ、ただちに洛陽へ戻し、2007年2月1日、洛陽第二文物工作隊に所蔵されることとなったという⁴⁾。なお、2009年12月に、私が洛陽に調査に赴いた際、この経幢は新たに建設された洛陽の博物館で公開・展示されていた。

以上のような経緯で「発見」されたため、この経幢の真偽については疑惑も付きまとったようであるが、本物であると鑑定されている⁵⁾。

-
- 1) 「大秦景教流行中国碑」の発見年代については、桑原隲蔵「大秦景教流行中国碑に就いて」（同『東洋史説苑』、弘文堂、1927年。再録：『桑原隲蔵全集』第1巻、岩波書店、1968年、386-409頁）を参照。
 - 2) 日本語で書かれた景教研究史としては、かなり古いのが石田幹之助「唐代支那に於ける基督教」（同『東亞文化史叢考』、東洋文庫、1973年、309-358頁）がある。またその後の景教研究史（日本・中国・欧米）を概観したものに、中国語で著された林悟殊『唐代景教再研究』（中国社会科学出版社、2003年）がある。
 - 3) 洛陽新発見の景教史料に関しては、中国で多くの報告書・論考が発表されている。そのうち代表的なものをまとめたのが、葛承雍編『景教遺珍——洛陽新出唐代景教経幢研究』（文物出版社、2009年）である。また日本語による紹介として、礪波護「唐代長安の景教碑と洛陽の景教経幢」（『書香』27（大谷大学図書館・博物館報）、2010年、7-12頁）がある。
 - 4) 羅焯「洛陽新出土《大秦景教宣元至本經及幢記》石幢の幾個問題」（『文物』2007-6 → 『景教遺珍』、34-58頁）および葛承雍「前言」（『景教遺珍』、1-4頁）、洛陽市第二文物工作隊「洛陽景教石経幢出土の調査」（『景教遺珍』、165-170頁）による。
 - 5) 林悟殊「補記：關於経幢真偽的鑑定」（『景教遺珍』、87-88頁。再録：同『中古夷教華化叢考』、蘭州大学出版社、2011

この新出の史料は石灰岩質の「青石」製の八角柱であり、その形態はいわゆる經幢の体をなしている。ただし、完全なものではなく、下方が斜めに切断されたような形になっていて、各面の残存状況は一致していない。各面の幅は14cm～16cm、縦は60cm～85cmとなっている。その經幢面には文字と図像が刻されており、文字は上述のごとく「大秦景教宣元至本經」と「大秦景教宣元至本經幢記」である。図像は、十字架と飛天である。以下、まずその積文を示してその全容を紹介し、ついでこの新出の史料の価値について述べてみたい。

二 經幢積文⁶⁾

…… [經幢正面第1面] ……………

祝曰

清淨阿羅訶 清淨大威力 清淨 [下欠]

…… [經幢正面第2面] ……………

- 1 大秦景教宣元至本經
- 2 時景通法王在大秦國那薩羅城和明宮寶法雲座將與二見了決真源 [下欠]
- 3 王無量覺衆及三百六十五種異見中民如是族類無邊無極自嗟空阒 [下欠]
- 4 念上觀空皇 [親承印旨] 告諸衆曰善來法衆至至無來今可通常啓生滅死各圓 [下欠]
- 5 常旨 無元無□無道無緣妙有非有湛寂常然吾聞太阿羅□ [下欠]
- 6 置因緣機軸自然著為象本因緣配為感乘剖判參羅三生七位□ [下欠]

…… [經幢正面第3面] ……………

- 7 作以為應旨順成不待而變合無成有破有成無諸所造化靡不□ [下欠]
- 8 嗣虔仰造化迷本匠王未曉阿羅訶功無所銜施無所仁包浩 [下欠]
- 9 悉見見故無界非聽悉聽聽故無界無力盡持力故無界嚮無 [下欠]
- 10 臨物象咸措唯靈感異積阒亡途是故以善教之以平治之 [下欠]
- 11 化終遷唯匠帝不虧不盈不濁不清保任真空常存□易 [下欠]
- 12 弥施訶應大慶原靈故慧圓悟之空有不空無於空不滯 [下欠]

…… [經幢正面第4面] ……………

- 13 盧訶那體究竟真凝常樂生命是知匠帝為無□逐不□ [下欠]
- 14 數曉人大晤了皆成益□民滯識是見將違蓋靈本渾 [下欠]

年、189-191頁)

6) 積文作成にあたっては、『景教遺珍』に掲載されている拓本（巻頭図版一～図版十）にもとづき、あわせて林悟殊の積文を参照した。林悟殊の積文については、本稿第3節を参照。

- 15 且容焉了已終亡焉聽爲主故通靈伏識不遂識遷 [下欠]
16 下備八境開生三常滅死八境之度長省深悔警慎 [下欠]
17 景通法王説至既已普觀衆晤於其會中詮以慧□ [下欠]
18 諸界但有人受持讀誦信解勤行當知其人德超 [下欠]

…… [經幢反面第1面] ……………

- 19 如海溢坳平日昇暗滅各證太寂曉自在常喜滌□ [下欠]
① 大秦景教宣元至本經幢記
② 夫至聖應現利洽無方我无元真主匠帝 [下欠]
③ 海而畜衆類日月輝照五星運行即 [下欠]
④ 散有終亡者通靈伏識才會無遺咸超 [下欠]
⑤ 海宥宥冥冥道不名子不語□莫得而也善 [下欠]

…… [經幢反面第2面] ……………

- ⑥ 無始未來之境則我匠帝阿羅訶也 [下欠]
⑦ 有能諷持者皆獲景福況書寫於幢銘□ [下欠]
⑧ 承家嗣嫡恨未展孝誠奄違庭訓高堂□ [下欠]
⑨ 森沉感因卑情蓬心建茲幢記鑄經刻石用 [下欠]
⑩ 尉 亡妣安國安氏太夫人神道及 亡師伯和 [下欠]
⑪ 願景日長懸朗明闇府真姓不迷即景性也夫求 [下欠]

…… [經幢反面第3面] ……………

- ⑫ 幽魂見在支属亦願無諸障難命等松筠長幼 [下欠]
⑬ 次叙立塋買兆之由所管即洛陽縣感德鄉柏仁□ [下欠]
⑭ 之始即元和九年十二月八日於崔行本處買保人 [下欠]
⑮ 戚歲時奠醑天地志同買南山之石磨龔塋澈刻勒書經 [下欠]
⑯ 于陵文翼自慙猥拙抽毫述文将来君子無見哂焉時 [下欠]
⑰ 勅東都右羽林軍押衙陪戎校尉守左威衛汝州梁川府 [下欠]

…… [經幢反面第4面] ……………

- ⑱ 中外親族題字如後 弟景僧清素 從兄少誠 舅安少連
⑲ 義叔上都左龍武軍散將兼押衙寧遠將軍守左武衛大將軍置同政[圓] [下欠]
⑳ 大秦寺 寺主法和玄應俗姓米 威儀大德玄慶俗姓米 九階大德志通俗姓康 [下欠]
㉑ 檢校塋及莊家人昌兒 故題記之

[其大和三年二月十六

日壬寅遷舉大事]⁷⁾

三

この經幢に刻されている「大秦景教宣元至本經」（釈文1～19行）は、敦煌文書中の典籍にある「大秦景教宣元本經」（以下、「敦煌本」）と対応するものといえる。「敦煌本」については、すでに羽田亨「大秦景教大聖通眞歸法讚及び大秦景教宣元至本經殘卷について」（『東方学』1、1950年。再録：『羽田博士史學論文集』下巻言語・宗教篇、同朋社、1958年、292-307頁）の研究があり、またその図版も紹介されている。

經幢「宣元至本經」と「敦煌本」を比較して校訂すると、「敦煌本」は、經幢「宣元至本經」の10行目までと対応しており、11行目以降の經文は、今回新たに得られたものということになる。また、經幢「宣元至本經」では下方が欠けているが、2行～10行については「敦煌本」によって補うことができる。また、文字についても若干の異同があるが、内容そのものに大きな移動はない。經幢「宣元至本經」については、林悟殊・殷小平「經幢版〈大秦景教宣元至本經〉考釈 — 唐代洛陽景教經幢研究之一」（『中華文史論叢』2008-1。再録：林悟殊『中古夷教華化叢考』、蘭州大学出版社、2011年、168-188頁）を参照されたい。

文化交渉学の観点から重要なのは、後半の「大秦景教宣元至本經幢記」（釈文①～②行）ということになる。「經幢記」によれば、「元和九年十二月八日」に「亡妣安國安氏太夫人」と「亡師伯（和）」の墓を造営するため、「洛陽縣感德郷柏仁□里」の土地を購入し、あわせてこの經幢を建立したという。この一連の行為に関わったのが、「景僧清素、從兄少誠、舅安少連」と「義叔の上都左龍武軍散將・兼押衙・寧遠將軍・守左武衛大將軍置同政[圓]」であった人物（名は不詳）、さらに「大秦寺寺主法和玄應俗姓米 威儀大德玄慶俗姓米 九階大德志通俗姓康」である。

經幢部分については、張乃翥「跋洛陽新出土的一件唐代景教石刻」（『西域研究』2007-1。再録：『景教遺珍』、5-16頁）、同「洛陽景教經幢与唐東都“感德郷”的胡人聚落」（『中原文物』2009-2、98-106頁）、羅焯「洛陽新出土《大秦景教宣元至本經及幢記》石幢の幾個問題」（『文物』2007-6。再録：『景教遺珍』、34-58頁）、殷小平・林悟殊「〈幢記〉若干問題考釈 — 唐代洛陽景教經幢研究之二」（『中華文史論叢』2008-2。再録：林悟殊『中古夷教華化叢考』、192-210頁）などの研究があり、論点・研究成果が発表されている。

この「經幢記」の記述から明らかとなる事実は、

- (1) 9世紀初めの洛陽に「大秦寺」、すなわちネストリウス派キリスト教の教会が存在した。
- (2) 洛陽大秦寺の神職にソグド系の人が就いていた。
- (3) 洛陽在住のソグド人に景教徒が存在した。
- (4) 唐・洛陽城外にソグド人聚落が存在した。

である。

7) この16文字は、「經幢記」刻文面の上部に刻されている。

唐代の洛陽に、長安と同じように大秦寺が存在したことはすでに745（天宝4）年の玄宗による詔勅の中に、

波斯經教は、大秦より出で、伝習して来り、久しく中国に行う。爲に初め寺を建つ。因りて以て名と爲す。將に人に示さんと欲すれば、必ず其の本を修む。其れ兩京の波斯寺、宜しく改め大秦寺と爲すべし。天下の諸府郡の置くも亦た准此せよ⁸⁾。

とあって、その存在は知られていた。また「大秦景教流行中国碑」正面下部に見える「助檢校試太常卿賜紫袈裟寺主僧業利」は、その左横にシリア文字で、

Gab^hri'él qaššīšâ w^e'arkîd^hîyaqôn w^erêš 'é(d)ttâ d^heK^hûmdân wad^heSarag^h.

(ガブリエル（僧業利）、司祭にして助祭長、Kumdân と Sarag の教会の長)⁹⁾

と刻されている。「Kumdân」は長安、「Sarag」は洛陽を指すから、「景教碑」が建立された781（建中2）年に、洛陽に大秦寺が存在したことがわかる。

「経幢記」には、はっきりと洛陽大秦寺という記述はないものの、経幢建立の地が唐の洛陽城郊外であり、それに「大秦寺寺主法和玄應」以下の神職にある者が関わっていたことから、この「大秦寺」は洛陽のそれであったとみなせる。

さらに興味深いのは、その神職に就いていた人物たちがいずれもソグド人であるということだ。「経幢記」の面白いのは、大秦寺寺主の法和玄應や威儀大徳の玄慶、九階大徳の志通の三人の俗姓が記されている点で、それぞれ米姓、米姓、康姓である。米姓は、ソグディアナのマーイムルグ出身のソグド人が名乗った姓であり、康姓はサマルカンド出身の者と関係あるというのが一般的認識である¹⁰⁾。

さらに、亡くなった「安氏」もソグド人が中国で名乗った姓で、ブハラと関係がある者である。そして、この「経幢記」の記載内容から、これら9世紀初めの洛陽に居住していたソグド人の一部に、景教を信仰していた集団がいたことが判明したのである。この点、唐代の長安にもソグド人景教徒が居たこと¹¹⁾と考え合わせると、唐代中国における景教の信仰状況の一端が垣間見える。

ところで、中央アジア出身のソグド人は、中国へ移住し、商業活動を展開する中で、北中国各地に彼らの植民聚落を形成していった。その具体的な場所などに関する研究は、榮新江「北朝隋唐粟特人之遷移及其聚落」（『国学研究』6、北京大学出版社、1999年。再録：榮新江『中古中国与外来文明』、北京、生活・読書・新知三聯出版社、2001年、37-110頁）および「北朝隋唐粟特人之遷移及其聚落補考」（『欧

8) 『唐会要』卷49、大秦寺、上海古籍出版社、1991年、1012頁。

9) P. Pelliot, *Recherches sur les Chrétiens d'Asie Centrale et d'Extrême-Orient, II, 1: La Stèle de Si-ngan fou* (Œuvres Posthumes de Paul Pelliot), Paris, Éditions de la Fondation Singer-Polignac, 1984, pp.55-57.

10) ソグド人が中国（漢字文化圏）で名乗った姓（ソグド姓）の成立に関しては、齊藤達也「北朝・隋唐史料に見えるソグド姓の成立について」（『史学雑誌』118-12、2009年、38-63頁）が最新の研究であり、参照すべきものである。

11) 葛承雍「唐代長安一個粟特家庭的景教信仰」（『歴史研究』2001-3、181-186頁）

亜学刊』6、北京、中華書局、2007年、165-178頁）によって進められた。その中で、洛陽におけるソグド人の居住地点として、唐洛陽城内の恵和坊、章善里、弘敬里、嘉善里、敦厚里、思順里、利仁坊、陶化里、河南里、履信坊、温柔里、福善坊などの名称が明らかになった。これに加え、張乃翥 [2009] は、「経幢記」及び洛陽郊外で出土した七方の唐代墓誌銘と浮図銘を利用し、洛陽城外の感徳郷にもソグド人聚落が存在したことを論証している。

ところで、この景教経幢は、文化交渉史上、どのような特徴があるのだろうか。それは、仏教の影響を受けているという点である。まずこの「経幢」という形式そのものが仏教的なものである [張乃翥 2007]。また、「宣元至本經」そのものも、大量の仏教的・道教的表現に満ち溢れているという。このことから景教僧の景浄が翻訳したとされる「宣元至本經」は、実は景浄、あるいは8世紀の中国に住んでいた教養ある者によって創作された中国化した景教の神学的論文であるという説も出されている [羅炤 2007]。

このように、この経幢は、景教史、ソグド人の東方活動史のみならず、広く文化交渉学の見地からも有用な史料であるといえ、広く利用されんことを願うものである。

